

## ☆ 予防接種の実施について

予防接種法に基づく定期予防接種は、住所のある市町村が行うことになっています。住民基本台帳に基づいて行いますので、赤ちゃんが生まれた時、転居した時には必ず届け出を出しましょう。

## ☆ 実施の時期

予防接種にはそれぞれ適した年齢があります。標準の年齢内のなるべく早い時期に受けましょう。具体的な順序や日程は、予防接種対象年齢について（p 4）を参照に、お子さんの体調、病気の流行状況をみて、かかりつけ医と相談して決めてください。

## ☆ 標準的な実施年齢がすぎたら

いろいろな事情で標準的な年齢に受けることができなかつたお子さんは、定められた年齢内ならその後も同様に受けることができます。また、長期の疾患等により、定められた年齢内に定期予防接種を受けられなかつたお子さんについて、特別な事情が認められる場合は、病気の治癒など接種できなかつた要因が解消した後2年以内（ワクチンにより例外あり）なら定期として接種することも可能です。

## 1 予防接種の方法

西予市が実施する予防接種は「個別接種」のみです。西予市の指定医療機関（別紙参照）、または広域化に参加している愛媛県内の医療機関に予約をし、お子さんの健康状態の良いときに予防接種を受けましょう。

## 2 予防接種の受け方

### （1）「予診票兼接種券」について

- ☆ 接種する予防接種の「予診票兼接種券」に記入してください。
- ☆ 予診票兼接種券は、医師が予防接種の適否を判断する大切なものです。お子さんの健康状態を正確に記入してください。
- ☆ 西予市以外でも、広域化に参加されている愛媛県内の医療機関であれば接種できます。

### （2）持参するもの

予防接種を受ける際には、必ず予診票兼接種券・母子健康手帳を忘れずに持っていきましょう。

### 3 予防接種の有効性

予防接種は、その病気にかからないことを目的にしていますが、受ける人の体質、その時の体調などによって抵抗力（免疫）ができないこともあります。もし確実に抵抗力（免疫）ができたかどうかを知りたい場合には、血液をとって血中の抗体を測定すればわかります。

また、不活化ワクチンでは、抵抗力（免疫）ができてそのままで少しずつ減っていくため、一定の間隔で追加接種が必要です。

### 4 予防接種の種類と特徴

予防接種で使うワクチンには、<sup>なま</sup>生ワクチン、<sup>ふかつが</sup>不活化ワクチンの2種類があります。

#### (1) 生ワクチンについて

どんなもの？	接種後のからだの変化は？	予防接種の種類
<p>生きた細菌やウイルスの毒性を弱めたもので、これを接種することによってその病気にかかった場合と同じような抵抗力（<sup>めんえき</sup>免疫）をつくらせるものです。</p>	<p>からだの中で毒性を弱めた細菌やウイルスの増殖がはじまるため、それぞれのワクチンがもっている性質に応じて、発熱や発疹の軽い症状が出ることがあります。</p> <p>十分な抵抗力（免疫）ができるのに約1か月が必要です。</p>	<p>麻しん 風しん 麻しん風しん（MR） 混合 BCG 水痘 ロタウイルス</p>

#### (2) 不活化ワクチンについて

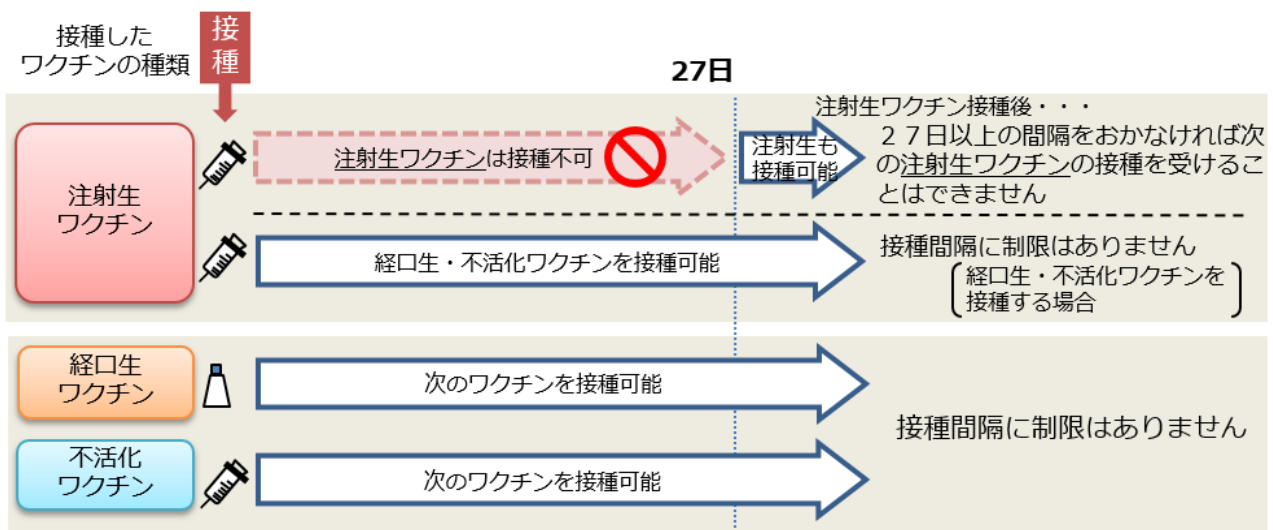
どんなもの？	接種後のからだの変化は？	予防接種の種類
<p>細菌やウイルスを殺し、抵抗力（免疫）をつくるのに必要な成分を取り出して毒性をなくしてつくったものです。</p>	<p>生ワクチンと違って、細菌やウイルスはからだの中で増殖しないため、数回接種して抵抗力（免疫）をつくります。</p> <p>一定の間隔で2～3回接種し最低限必要な抵抗力（基礎免疫）をつけたあと、約1年後に追加接種をして十分な抵抗力（免疫）ができあがります。</p> <p>ただししばらくすると、また少しずつ抵抗力（免疫）が減ってしまうため、長期に抵抗力（免疫）を保つためには、それぞれのワクチンにあわせて一定の間隔で追加接種が必要です。</p>	<p>H i b 小児の肺炎球菌 四種混合（ジフテリア・百日せき・ポリオ・破傷風） 日本脳炎 二種混合（ジフテリア・破傷風） B型肝炎</p>

## 5 予防接種の接種間隔

異なるワクチンの接種間隔について、注射生ワクチンどうしを接種する場合は27日以上あける制限は維持しつつ、その他のワクチンの組み合わせについては、一律の日数制限は設けないことになりました。

### 【異なる種類のワクチンを接種する際の接種間隔のルール】

- ・「注射生ワクチン」の接種後27日以上の間隔をおかなければ、「注射生ワクチン」の接種を受けることはできません（変更なし）。
- ・それ以外のワクチンの組み合わせでは、前のワクチン接種からの間隔にかかわらず、医師が認める場合、次のワクチンを受けることができるようになりました。



※ ワクチンの種類について

注射生ワクチン：麻しん風しん混合ワクチン・水痘ワクチン・BCG ワクチン・おたふくかぜワクチン など

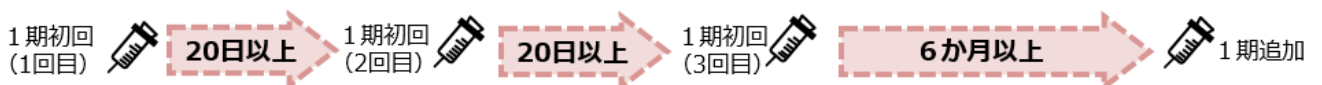
経口生ワクチン：ロタウイルスワクチン など

不活化ワクチン：ヒブワクチン・小児用肺炎球菌ワクチン・B型肝炎ワクチン・4種混合ワクチン・日本脳炎ワクチン・季節性インフルエンザワクチン など

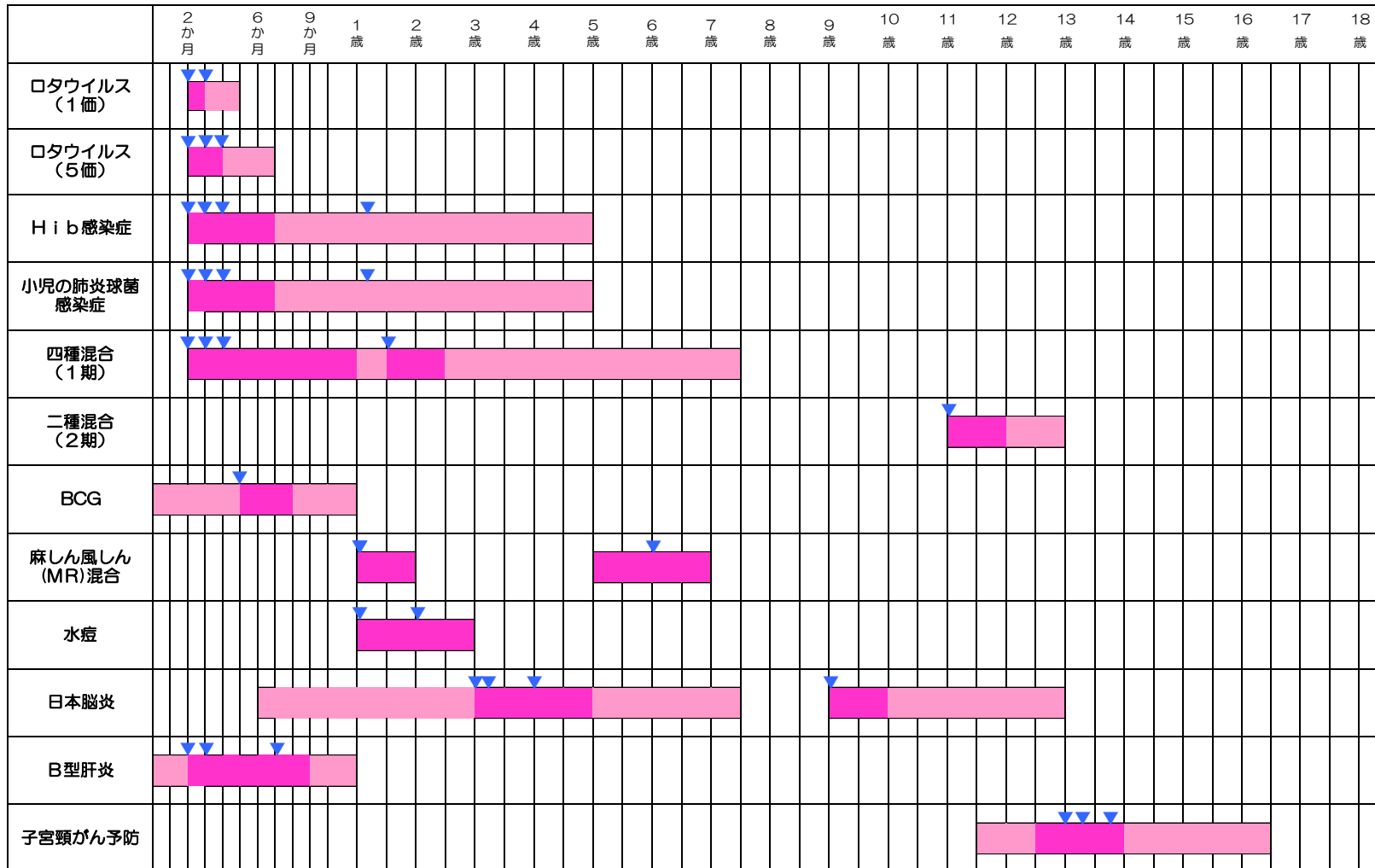
### 【同じ種類のワクチンの接種を複数回受ける際の接種間隔ルール】

- ・同じ種類のワクチンの接種を複数回受ける場合、ワクチンごとに決められた間隔を守る必要があります。

例) 4種混合ワクチン



# 予防接種対象年齢について



☆ 上の表の ■ および ■ の期間は、予防接種法で定められた予防接種の期間です。▼ は標準的な接種時期を示しています。  
 ■ の期間であればいつでも接種可能ですが、病気にかかりやすい年齢を考慮して定められた時期（標準的な接種年齢）である  
 ■ の期間中にできるだけ接種を受けましょう！

## 7 予防接種を受けに行く前に

### (1) 一般的注意

予防接種は細菌やウイルスなどの感染を予防するものですから、体調のよい時に受けるのが原則です。日ごろからお子さんの体質、体調など健康状態によく気を配ってください。そして何か気にかかることがあれば、あらかじめかかりつけの医師や市役所担当課にご相談ください。

安全に予防接種を受けられるよう、以下の注意を守りましょう。

- ☆ 当日は朝からお子さんの状態をよく観察し、普段と変わらないことを確認しましょう。体調が悪と思ったら、接種する前に医師と相談しましょう。
- ☆ 受ける予定の予防接種について、予防接種手帳や通知文書をよく読んで、必要性や副反応についてよく理解しましょう。わからないことは接種を受ける前に質問しましょう。
- ☆ 母子健康手帳は必ず持っていきましょう。
- ☆ 予診票兼接種券は接種時の大切な情報です。責任をもって記入しましょう。
- ☆ 日ごろの状態をよく知っている保護者の方が連れていきましょう。
- ☆ \***ガンマグロブリン**の注射を3～6か月以内に受けた方は、麻しんなどの予防接種の効果が十分でないことがあります。

◎**ガンマグロブリン**の注射を受けたことがあるお子さんについての接種時期は、かかりつけ医と相談してください。

#### **ガンマグロブリン**

血液製剤の一種で、A型肝炎などの感染症の予防目的や重症の感染症の治療目的などに使用します。

### (2) 予防接種を受けることができないお子さん

- ☆ 明らかに発熱のあるお子さん  
一般的に熱のある人は、接種会場で測定した体温が37.5℃以上の場合をいいます。
- ☆ じゅうとく重篤な急性疾患にかかっていることが明らかなお子さん  
急性で重症な病気で薬を飲む必要のあるようなお子さんは、その後の病気の変化もわかりませんので、その日は見合わせるのが原則です。
- ☆ その日に受ける予防接種によって、または予防接種に含まれる成分で  
\***アナフィラキシー**を起こしたことがあるお子さん
- ☆ その他、医師が不適当な状態と判断した場合

#### **アナフィラキシー**

通常接種後約30分以内に起こるひどいアレルギー反応のことです。汗がたくさん出る、顔が急に腫れる、全身にひどいじんましんが出るほか、はきけ、嘔吐、声が出にくい、息が苦しいなどの症状やショック状態になるようなはげしい全身反応のことです。

### (3) 予防接種を受ける際に医師とよく相談しなくてはならないお子さん

以下に該当すると思われるお子さんは、かかりつけ医がある場合には必ず前もって相談し、接種に行きましょう。

☆ 心臓病、腎臓病、肝臓病、血液の病気や発育障害などで治療を受けているお子さん

☆ 接種後2日以内に発熱、発疹<sup>ほっしん</sup>やじんましんなどアレルギー症状がみられたお子さん

☆ 今までにけいれん（ひきつけ）を起こしたことがあるお子さん

けいれん（ひきつけ）を起こした年齢、そのとき熱があったか、熱がなかったか、その後起こっているか、受けるワクチンの種類は何かなどで条件が異なります。

☆ 免疫状態を検査して異常を指摘されたことのある、または近親者に先天性免疫不全症の方がいるお子さん

☆ ワクチンには卵の成分、抗生物質、安定剤などが入っているものがあるため、これらにアレルギーがあるといわれたことのあるお子さん

☆ BCG接種の場合は、家族に結核患者がいて長期に接触があった場合など、過去に結核に感染している疑いのあるお子さん

### (4) 予防接種を受けた後の一般的注意事項

☆ 予防接種を受けたあと30分間程度は、急な副反応がおこることがまれにありますので、医療機関でお子さんの様子を観察するか、医師とすぐに連絡が取れるようにしておきましょう。

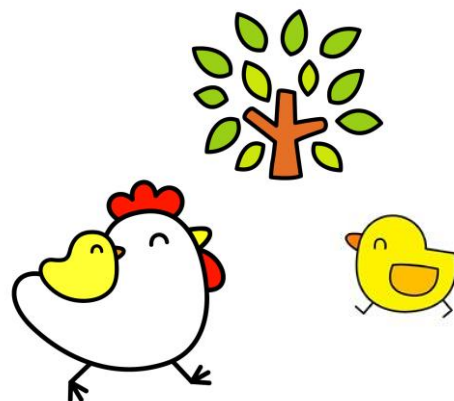
☆ 接種後、注射部位のひどい腫れ<sup>は</sup>、高熱、ひきつけなどの症状があった場合は、速やかに医師の診察を受けましょう。

☆ 接種後、生ワクチンでは4週間、不活化ワクチンでは1週間は副反応の出現に注意しましょう。

☆ 接種部位は清潔に保ちましょう。

入浴は差し支えありませんが、接種部位をこすることはやめましょう。

☆ 接種当日のはげしい運動はさけましょう。



## 予防接種に行く前のチェック

- 1 お子さんの体調はいいですか。
- 2 今日受ける予防接種について、必要性、効果、副反応などを理解していますか。  
わからないことがあれば質問をメモにしておきましょう。
- 3 予診票兼接種券の記入はすみしましたか。
- 4 母子健康手帳は持ちましたか。
- 5 前回の予防接種から必要な間隔があいていますか。

さあ 出かけましょう！



## 8 予防接種の対象となる病気とワクチン

### 予防接種による副反応及び健康被害救済制度

予防接種と聞くと副反応が心配なため、消極的になっておられる方もいるようですが、現在日本で使用されているワクチンは、世界の中でも優秀なもので、副反応の頻度も少ないものです。

しかし、人間のからだの性質は一人一人違うため、まれに副反応が生じる場合もあります。そのため、お子さんのからだのことをよくわかっているかかりつけ医によく診てもらい、よく相談したうえで接種を受けるかどうか判断することが大切です。

予防接種を受けたことにより極めてまれではありますが、重篤な健康被害が生じることがあります。その場合は、医師の診察を受けてください。予防接種を受けたことによる副反応として、疾病や障害などの健康被害が発生したと認められた場合は、救済される制度があります。

予防接種健康被害救済制度の対象となるのは、予防接種法に基づいて実施された予防接種で厚生労働大臣が認定した方です。

なお、任意接種の場合は、別の救済措置受けることができます。



## (1) Hib感染症

### ☆ 病気の説明と症状

Hibは、髄膜炎や肺炎などの全身感染症や、中耳炎、副鼻腔炎、気管支炎などを起こす乳幼児の重篤な病原細菌です。以前は年間約400人が発症し、その過半数が生後4か月から1歳までの乳児であったため、時期が来れば早めに予防接種を受けましょう。

### ☆ Hibワクチン（乾燥ヘモフィルスb型ワクチン）

Hibワクチンは、日本では平成20年12月から接種できるようになったワクチンです。このワクチンを4回接種した人のほぼ100%に抗体（免疫）ができ、Hib感染症に対する高い予防効果が認められています。

主な副反応は、接種局所の発赤、腫脹（はれ）や発熱などです。

### ☆ Hibワクチンの接種時期

標準的な接種は、初回1回目を生後2か月以上7か月未満で接種し、その後生後12か月までに27日以上（標準的には27日から56日まで）の間隔をおいて2回接種します。

追加は、初回の3回接種のあと7か月以上（標準的には7か月から13か月）の間隔をおいて1回接種します。

また、接種開始が生後7か月以上12か月未満の場合は初回2回（生後12か月までに27日以上の間隔）、追加1回（初回接種後7か月以上の間隔）の合計3回、接種開始が1歳以上5歳未満の場合は1回のみとなります。

以上のように接種開始時期等により接種回数が異なりますので、注意が必要です。

## (2) 小児の肺炎球菌感染症

### ☆ 病気の説明と症状

肺炎球菌は細菌による子どもの感染症の主な原因菌の一つです。

多くの子どもがのどや鼻に保菌していて、体力や抵抗力が落ちたときなどに菌が体内に入り込み、ワクチン導入前は年間150人くらいが化膿性髄膜炎を発症していました。他に菌血症、肺炎、副鼻腔炎、中耳炎といった病気を起こすこともあります。

肺炎球菌性の髄膜炎になった人のうち、約21%の子どもが水頭症、難聴、発育障害などの後遺症が残ったり死亡したりしています。生後3か月から5歳未満がかかりやすいので、時期が来れば早めに予防接種を受けましょう。

### ☆ 小児の肺炎球菌ワクチン（沈降13価肺炎球菌結合型ワクチン）

肺炎球菌の中でも、子どもで重い病気を起こしやすい13の型に対応したワクチンです。

日本では、平成25年11月から接種できるようになりました。

主な副反応は、接種局所の紅斑（皮膚の表面が赤くなること）、腫脹（はれ）や発熱などです。



## ☆ 小児の肺炎球菌ワクチンの接種時期

標準的な接種は、初回1回目を生後2か月以上7か月未満で接種し、その後生後12か月までに27日以上の間隔をおいて2回接種します。ただし、2、3回目は生後24か月までに接種し、それを超えた場合は接種しません。

また、2回目は生後12か月までに接種し、それを超えた場合は3回目の接種は行いません。(追加接種は可能)

追加は、初回の3回接種のあと60日以上の間隔をおいて生後12か月以降で1回接種します。生後12か月から15か月が標準的な接種です。

また、接種開始が生後7か月以上12か月未満の場合は初回2回(標準的には生後12か月までに27日以上の間隔)、追加1回(初回接種後60日以上の間隔)の合計3回となります。ただし、2回目は生後24か月までに接種し、それを超えた場合は接種しません。接種開始が1歳以上2歳未満の場合は2回(60日以上の間隔)、2歳以上5歳未満の場合は1回のみとなります。

H i b ワクチン同様、接種開始時期等により接種回数が異なりますので、注意が必要です。

## (3) B型肝炎

### ☆ 病気の説明

B型肝炎ウイルスの感染を受けると、急性肝炎となりそのまま回復する場合もあれば、慢性肝炎となる場合もあります。一部劇症肝炎といって、激しい症状から死に至ることもあります。

また、症状としては明らかにならないままウイルスが肝臓の中に潜み、年月を経て慢性肝炎・肝硬変・肝がんなどになることがあります。ことに年齢が小さいほど、急性肝炎の症状は軽いかあるいは症状はあまりはっきりしない一方、ウイルスがそのまま潜んでしまう持続感染の形をとりやすいことが知られています。

### ☆ B型肝炎ワクチン

国内では、平成28年10月1日から定期接種となりました。

B型肝炎ワクチンは、ことに小児の場合は肝炎の予防というより持続肝炎を防ぎ、将来発生するかもしれない慢性肝炎・肝硬変・肝がんの発生を防ごうとすることが最大の目的です。酵母由来のリコンビナントワクチンで、母子感染予防、HBV陽性血液での針刺し事故や水平感染予防にも使用される。副反応は、倦怠感や局所の痛みで、新生児・乳児についても問題はなく、一般的には重大なものは認められない。

### ☆ B型肝炎ワクチンの接種時期

出生直後から1歳未満の間にB型肝炎の接種を行います。標準的な接種時期は生後2か月から9か月です。27日以上の間隔をおいて2回接種した後、1回目から139日以上の間隔をおいて3回目を接種します。

## (4) ロタウイルス感染症

### ☆ 病気の説明と症状

口から侵入したロタウイルスが腸管に感染して発症します。感染力が非常に強く、手洗いや消毒などをしっかりしても、感染予防をすることが難しいため、乳幼児のうちに、ほとんどの子どもが感染します。下痢や嘔吐は1週間程度で治りますが、下痢、嘔吐が激しくなると、脱水症状を起こす場合もあり、乳幼児の急性胃腸炎の入院の中で、もっとも多い感染症です。一生のうちに何度も感染するウイルスですが、初めてロタウイルスに感染した時は、特に重症化しやすく、まれに脳や腎臓に影響をおよぼすこともあり、注意が必要です。生後、すぐに感染する場合もあるので、ワクチンの接種は、早い時期に完了させます。

### ☆ ロタウイルス感染症ワクチン

国内では、令和2年10月1日から定期接種となりました。

ロタウイルスワクチンは2種類（1価・5価）あり、どちらも生ワクチン（弱毒化したウイルス）で、飲むワクチンです。医療機関で相談し、どちらかのワクチンを選んでください。2種類とも、予防効果や安全性に差はありませんが、接種回数が異なりますので、他のワクチンとの接種スケジュールなどを考慮して選択します。なお、途中からワクチンの種類を変更することはできませんので、最初に接種したワクチンを2回目以降も接種します。多くのワクチンの接種が重なる期間ですので、医療機関と相談して、他のワクチン接種と合わせて同時に接種することも検討してください。

### ☆ ロタウイルス感染症ワクチンの接種時期

標準的な接種は初回1回目を生後2か月から出生14週6日までに接種します。その後は27日以上の間隔をおいて最初に接種したワクチンを2回目以降も接種します。

出生15週0日以降の初回接種はおすすめしません。

- ・ロタリックス（1価）：出生6週から24週 2回接種（27日以上の間隔をあける）
- ・ロタテック（5価）：出生6週から32週 3回接種（27日以上の間隔をあける）

## (5) ジフテリア・百日せき・ポリオ・破傷風

### ☆ 病気の説明と症状

#### ★ ジフテリア

ジフテリア菌の※飛沫感染で起こります。

1981年にジフテリア・百日せき・破傷風（DPT）ワクチンが導入され、現在では患者発生数は年間1名程度です。ただし、ジフテリアは感染しても10%程度の人に症状が出るだけで症状が出ず、保菌者となり、その人を通じて感染することがあります。

感染は主にのどですが、鼻にも感染します。症状は高熱、のどの痛み、犬吠様のせき、嘔吐などで、偽膜と呼ばれる膜ができて窒息死することがあります。発病2～3週間後には菌の出す毒素によって心筋障害や神経麻痺をおこすことがあるため注意が必要です。

### 飛沫感染（ひまつかんせん）

ウイルスや細菌がせきやくしゃみなどにより、細かい唾液<sup>たみま</sup>や気道分泌物につつまれて空气中に飛びだし、約1mの範囲で人に感染させることです。

#### ★ 百日せき

百日せき菌の飛沫感染で起こります。

1948年から百日せきワクチンの接種がはじまって以来、患者数は減少しています。

最近、長引くせきを特徴とする思春期、成人の百日せきがみられ、乳幼児の感染源となり重症化する例がありますので、注意しましょう。

百日せきは普通のカゼのような症状ではじまりますが、熱は出ません。続いてせきがひどくなり、顔を真っ赤にして連続性にせき込むようになり、せきのあと急に息を吸い込むので、笛を吹くような音が出ます。乳幼児は、せきで呼吸ができず、くちびるが青くなったり（チアノーゼ）けいれんが起きることがあります。肺炎や脳症などの重い合併症を起こしたり、乳児では命を落とす例もあります。

#### ★ ポリオ（急性灰白髄炎）

ポリオウイルスはヒトからヒトへ感染します。感染した人の便中に排泄<sup>はいせつ</sup>されたウイルスが口から入りのどや小腸で増殖します。

しかし、ほとんどの例は、症状が出ず一生抵抗力（免疫）が得られます。

「小児まひ」と呼ばれ、わが国でも1960年代前半までは流行を繰り返していましたが、予防接種の効果で現在は国内での自然感染は報告されていません。現在でも南西アジアやアフリカ諸国ではポリオの流行があるため、日本に入ってくる可能性があります。予防のためにワクチンを接種し免疫をつけておきましょう。

ポリオウイルスに感染すると、100人中5～10人はかぜ様の症状を呈し、発熱や頭痛、嘔吐<sup>おうと</sup>があらわれます。一部は手足の麻痺<sup>まひ</sup>を起こしたり、呼吸困難により死亡することもあります。

#### ★ 破傷風

この病気は土の中にいる菌が原因です。日本中どこでも菌はいるため、感染する機会は常にあります。気づかない程度の軽い刺し傷から菌が入りからだの中で増えると、菌の出す毒素のために、口が開かなくなったり、けいれんをおこしたり、死亡することもあります。

#### ☆ 四種混合ワクチン（ジフテリア・百日せき・ポリオ・破傷風）

##### 二種混合トキソイド（ジフテリア・破傷風）

四種混合ワクチンは、日本では平成24年11月から定期予防接種として使用できるようになったワクチンです。

主な副反応は、注射部位の紅斑<sup>こうはん</sup>、腫脹<sup>しゅちやう</sup>（はれ）、硬結<sup>こうけつ</sup>（しこり）、発熱ですが、いずれも

一過性のもので、通常、数日中に消失します。まれに生じる重い副反応としては、アナフィラキシー様症状、血小板減少性紫斑病、脳症、けいれん等が報告されています。

主に2期で接種する二種混合トキソイドの主な副反応は、紅斑、腫脹(はれ)などです。

#### ☆ 四種混合ワクチン(ジフテリア・百日せき・ポリオ・破傷風)等の接種期間

1期として20日以上の間隔で初回接種3回(標準的には20日から56日の間隔)、初回3回終了後、6か月以上の間隔で追加接種1回(標準的には初回接種3回終了後、1年から1年半までに)の合計4回接種します。

また、2期として11~12歳時(通常小学6年生)に二種混合トキソイド(DT)を1回接種します。

四種類の病気のうちどれかに罹った場合でも、四種混合ワクチンを接種することが可能です。接種をする前に医師に相談してください。

ただし、2期の予防接種に使用するのは二種混合トキソイド(DT)のみです。

### (6) 結核

#### ☆ 病気の説明

結核菌の感染で起こります。わが国の結核患者はかなり減少しましたが、まだ2万人を超える患者が毎年発生しており、大人から子どもへ感染することも少なくありません。

また、結核に対する抵抗力はお母さんからもらうことができませんので、生まれたばかりの赤ちゃんもかかる心配があります。乳幼児は結核に対する抵抗力が弱いので、全身性の結核症にかかったり、結核性髄膜炎けっかくせいずいまくえんになることもあり、重い後遺症を残す可能性があります。

#### ☆ BCGワクチン

BCGはウシ型結核菌を弱めた生ワクチンです。接種後10日頃に接種局所に赤いポツポツができ、一部に小さなうみができることがあります。

この反応は接種後4週間頃に最も強くなりますが、その後はかさぶたができて治り、接種後3か月までには小さな傷あとが残るだけになります。これは異常反応ではなく、BCG接種により抵抗力(免疫)がついた証拠です。包帯をしたり、バンソウコウをはったりしないで、そのまま清潔を保ってください。

副反応としては、接種をした側のわきの下のリンパ節がまれにはれることがあります。ただれたり、大変大きく腫れたり、まれに化膿して自然にやぶれてうみが出た場合は医師に診てもらってください。接種後10日以内に上記のような反応が起こった場合、結核に感染している可能性が高いため、接種を受けた医療機関を受診してください。

#### ☆ BCGの接種時期

出生直後から1歳未満の間にBCGの接種を行いますが、標準的な接種時期は生後5か月から8か月です。

## (7) すいとう 水痘

### ☆ 病気の説明

水痘とは、いわゆる「みずぼうそう」のことで、水痘帯状疱疹ウイルスというウイルスによって引き起こされる発疹性の病気です。\***空気感染**、飛沫感染、接触感染により広がり、その潜伏期間は感染から2週間程度とされています。

発疹の発現する前から発熱が認められ、典型的な症例では、発疹は紅斑から始まり、水疱、膿疱（粘度のある液体が含まれる水疱）を経て痂皮化（かさぶたになること）して治癒するとされています。

一部は重症化し、近年の統計によれば、我が国では年間100万人程度が発症し、4,000人程度が入院、20人程度が死亡していると推定されています。

水痘は主に小児の病気で、9歳以下での発症が90%以上を占めるとされています。小児における重症化は、熱性痙攣、肺炎、気管支炎等の合併症によるものです。

成人での水痘も稀に見られますが、成人に水痘が発症した場合、水痘そのものが重症化するリスクが高いとされています。

#### 空気感染（くうきかんせん）

ウイルスや細菌が空気中に飛びだし、1m以上を超えて人に感染させることです。  
麻疹（はしか）、水痘（水ぼうそう）、結核が空気感染します。

### ☆ 水痘ワクチン（乾燥弱毒生水痘ワクチン）

国内では、平成26年10月から定期接種として、乾燥弱毒生水痘ワクチンが用いられています。

主な副反応は、発赤や腫脹（はれ）<sup>しゅちよう</sup>（はれ）、発熱などですが、まれにアナフィラキシー様症状、急性血小板減少性紫斑病などがあります。

### ☆ 水痘の接種時期

1歳以上3歳未満の間に3か月以上の間隔で2回接種します。標準的には生後12月から15月の間に1回接種後、6か月から1年の間隔で2回目を接種します。

水痘ワクチンは、1回の接種により重症の水痘をほぼ100%予防でき、2回目の接種により軽症の水痘も含めその発症を予防できると考えられています。

## (8) 麻疹・風疹

### ☆ 麻疹（はしか）の病気の説明

麻疹ウイルスの空気感染によっておこる病気です。感染力が強く、予防接種を受けないと多くの人がかかる病気です。

発熱、せき、鼻汁、めやに、発疹<sup>ほっしん</sup>を主症状とします。最初3～4日間は38℃前後の熱で、

一時おさまりかけたかと思うと、また 39～40℃の高熱と発疹が出てきます。高熱は3～4日で解熱し、次第に発疹も消失しますが、しばらく色素沈着が残ります。

主な合併症としては、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎があります。患者100人中、中耳炎は7～9人、肺炎は1～6人に合併し、脳炎は1,000人に1～2人の割合で発生が見られます。

また、亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という慢性に経過する脳炎は約5万例に1例発生します。麻しん（はしか）にかかった人の数千人に1人の割合で死亡します。

予防接種では、これらの重い合併症はほとんどみられません。ぜひ予防接種を受けましょう。

## ☆ 風しんの病気の説明

風しんウイルスの飛沫感染によっておこる病気です。潜伏期間は2～3週間です。

軽いかぜ症状ではじまり、発疹、発熱、後頸部リンパ節腫脹などが主症状です。そのほか眼球結膜の充血もみられます。発疹や発熱は約3日間で軽快するため、「三日ばしか」とも呼ばれています。

合併症として、関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。血小板減少性紫斑病は患者3,000人に1人、脳炎は患者6,000人に1人くらいです。大人になってからかかると一般に重症化しやすくなります。

また、妊娠初期に風しんウイルスに感染すると、胎児に感染して先天性風しん症候群と呼ばれる病気になり、心臓病や白内障などの障害を持って生まれる可能性が高くなります。

## ☆ 麻しん風しん混合（MR）ワクチン

麻しんウイルスと風しんウイルスを弱毒化して作った生ワクチンです。

主な副反応は発熱と発疹です。

## ☆ 麻しん風しん混合ワクチンの接種時期

- ・第1期 1歳以上2歳未満の間に1回
- ・第2期 小学校入学前の1年間に1回

1歳から2歳の間に麻しんまたは風しんにかかる可能性が高いので、時期がなるべく早く接種してください。

1回の接種で95%以上は免疫を得ることになりますが、得られなかった場合と年月がたつて免疫が下がることを防ぐために2回の接種となりました。

なお、希望により単独ワクチンの接種も可能ですが、「麻しん」か「風しん」のどちらかにかかった場合も麻しん風しん混合ワクチンの接種が可能です。



## (9) 日本脳炎

### ☆ 病気の説明

日本脳炎ウイルスの感染で起こります。ヒトから直接ではなくブタの体中で増えたウイルスが蚊によって媒介されます。7～10日の潜伏期間後、高熱、頭痛、嘔吐、意識障害、け

いれんなどの症状を示す急性脳炎になります。

感染者のうち100～1,000人に1人が脳炎を発症します。脳炎のほか髄膜炎や夏かぜ様の症状で終わる人もいます。脳炎にかかったときの死亡率は20～40%ですが、神経の後遺症を残す人も多くあります。流行は西日本地域が中心ですが、ウイルスは北海道などの一部を除く日本全体に分布しています。この地域で飼育されているブタでの流行は毎年6月から始まり10月まで続きますが、この間に地域によっては80%以上のブタが感染しています。以前には小児、学童に発生していましたが、予防接種の普及などで減少し、最近では予防接種を受けていない高齢者を中心に患者が発生しています。

## ☆ 日本脳炎ワクチン

乾燥細胞培養日本脳炎ワクチンは、ベロ細胞という細胞でウイルス増殖させ、ホルマリンなどでウイルスを殺し（不活化）、精製したものです。

主な副反応は、発熱や発赤、腫脹（はれ）などです。

### ● ADEM（急性散在性脳脊髄炎）

一般にウイルス感染後、あるいはワクチン接種後に、まれに発生する脳神経系の病気です。ワクチン接種後の場合は、通常数日から数週間程度で、発熱、頭痛、けいれん、運動障害などの症状がでます。

## ☆ 日本脳炎ワクチンの接種時期

1期（初回と追加）、2期に分けて合計4回行います。

1期の初回は、生後6～90か月の間に6日以上（標準的には6日から28日）の間隔をおいて2回接種します。

なお、標準的な接種時期は3歳です。

1期の追加は、初回の2回接種後6か月以上の間隔をおいて（標準的にはおおむね1年後）に1回接種します。

2期は、9～12歳の間1回接種します。

